

國學院大學學術情報リポジトリ

サマセット・モームの『聖火』における三つの愛

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-20 キーワード (Ja): 英文学, サマセット・モーム , 聖火, 劇 キーワード (En): W. S. Maugham 作成者: 藤野, 敬介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000035

サマセット・モームの『聖火』 における三つの愛

藤野 敬介

I

『聖火』(*The Sacred Flame: A Play in Three Acts*)は、ウィリアム・サマセット・モーム(William Somerset Maugham, 1874-1965)が1928年、54歳の時に書いた戯曲である。

この作品は、モームの「後期四作」として知られる、彼が劇壇から引退し小説に専念することを決意してから書いた劇作のうち、最初に上演されたものである。後期四作は、『聖火』の後、『働き手』(*The Breadwinner*, 1930)、『報いられたもの』(*For Services Rendered*, 1932)、『シェピー』(*Sheppey*, 1933)の順に上演され、モームは四半世紀にわたった劇作家としてのキャリアに自ら幕を下ろした。

モームは1938年に出版した回想録『サミング・アップ』(*The Summing Up*)の中で、この作品が書かれた経緯を明かしている。風俗喜劇(Comedy of manners)の名手として劇壇において確固たる地位を確立していたモームであったが、次第に戯曲の執筆に対する熱意を失なうようになる。その理由については、主に同書の第40章と第41章で述べられているのだが、要約すると、芝居は劇場支配人や演出家等の他者との共同作業が必須であるがゆえに様々な制約があり、小説の持つ自由さに較べて窮屈さを感じるようになったこと。そして、自分の書く作品が大衆の好みから遊離していることを実感したことを挙げている。

ところが、劇作家を引退するにあたって、モームにはどうしてもやっておきたいことがあった。これについて、彼は『サミング・アップ』の第42章でこう記している。

しかし私の頭にはまだ書きたい劇がいくつもあった。
このうちの二、三は曖昧で取るに足らぬような計画
であったから、書かなくても構わないのだが、四つの
劇だけは頭の中できちんと書かれる順番を待ってい
た。もし書かなければ、いつまでも書くことを迫り、
私は落ち着けないことが、自分でよく分かっていた。

(187)

具体的な構想を持ちつつも、モームが四つの劇を書かずにいた理由は、
それらが観客に受けるとは到底思えず、劇場側に損害を与えてしまうこ
とを危惧したからであった。当時の欧米の演劇界では、劇場が 5 作品を
上演すると 4 作品は興行的に失敗し、1 作品は成功を収めることが一般
的であったが、モームの劇は 4 作品が成功し、1 作品が失敗するという驚
異的な成果を収めていた。そこで、彼はこの四つの劇については、観客
受けの良さそうな順に（つまり、興行成績が次第に下がっていくように）
上演の順番を決め、自分の作品の評判を最後まで落とさないように配慮
した。そうすることで、劇場側への負担を最大限に抑えようとしたので
ある。その結果、4 作品のうち最初の二つ（『聖火』、『働き手』）はかなりの
成功を収め、残りの二つ（『報いられたもの』、『シェピー』）は予想通り
の不入りとなった。

『聖火』は、戯曲が書かれたのと同年の 1928 年にニューヨークで初演
され、翌年にはロンドンで上演された。記録によると、ロンドンでの公
演回数は 209 回。同じくロンドンにおける公演回数は、『働き手』が 158
回、『報いられたもの』が 78 回、『シェピー』が 83 回であった。（宮川
144）劇作家モームの出世作である『フレデリック夫人』（*Lady Frederick*,
1903）の 422 回、代表作である『おえら方』（*Our Betters*, 1915）の 548
回には及ばないものの、同じく彼の代表作である『ひとめぐり』（*The
Circle*, 1921）の 180 回超と比べても、『聖火』はかなりの成功を収めた
と言ってよいだろう。（『モームの謎』「モーム年表」 4-7）

さて、その『聖火』はモームが得意とした風俗喜劇とは大きく異なり、

むしろイブセン (Henrick Johan Ibsen, 1828-1906) やショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) 流の思想劇、問題劇であるとの認識が一般的である。航空事故で半身不随となった長男、彼の介護と突然の死、次男と長男の妻との不倫と彼女の妊娠、安楽死等の、様々な人生問題、社会問題がそこには描かれている。しかし、この作品全体を貫く最も重要なテーマは「愛」であると筆者は考える。劇中では登場人物相互の間で交わされる様々な愛が描かれているが、特に三人の女性 — ステラ、ウェイランド看護師、タブレット夫人 — が示す三つの愛の形は、相違の部分も含めて、『聖火』という作品の根幹を成しており、そこからはモームがどうしてもこの劇を書くことなしに劇作家を引退できないと考えていたのか、その理由までもが浮かび上がってくるのである。

そこで本稿では、簡単に『聖火』のあらすじに触れた後で、この三人の登場人物の愛について考察し、最後はモームにとってこの愛の物語を描くことがどうしても必要であったのか、その理由を明らかにすることを試みたい。

II

『聖火』は三幕の構成。時は、第一次世界大戦から約六年を経過した、六月中旬のある夜から翌日の昼過ぎまで。所は、三幕を通じて、ロンドン近郊にある上級階級に属するタブレット夫人 (Mrs. Tabret) の住居ギャトリー・ハウス (Gatley House) の応接間に設定されている。

一家の長男モーリス (Maurice Tabret) は、航空兵として従軍し無事に帰還した後、民間会社のパイロットとして働いていたのだが、新型機のテスト飛行中の墜落事故で下半身に麻痺が残ってしまう。家庭医であるハーヴェスター医師 (Dr. Harvester) の診立てによると、彼が麻痺状態から回復する見込みはなく、住み込みの看護師ウェイランド (Nurse Wayland) の看護を受けて、どうにか生活をしている。それでも彼は、普段は努めて明るく振る舞い、軽い冗談を飛ばしながら毎日を送っている。彼には美しい妻ステラ (Stella Tabret)、母親であるタブレット夫人、

中米のグアテマラでコーヒー栽培業を成功させ、兄の見舞いのために一時帰国中の弟のコリン (Colin Tabret) という家族がいる。ステラとコリンがモーリスの強い勧めで観に行ったオペラから帰ってきたその晩、日頃は取り乱すことなどほとんどないモーリスが、突然ステラに取り縋って泣き出し、彼女はそんな彼を優しく慰める。夜が更けて人々が去り、コリンと二人きりになったステラの口から、彼女とコリンが人目を忍ぶ中になっていることを示唆する台詞が飛び出し、第一幕が終わる。

第二幕は翌朝の遅い時間、モーリスの急死の報を受けて駆け付けた、一家の旧友で元インド駐在の警察官リコンダ少佐 (Major Liconda) 登場の場面から始まる。どうやらモーリスは夜間に死亡したらしく、タブレット邸は上を下への大騒ぎとなる。ハーヴェスター医師は、死因を心臓麻痺と診断するが、遺体の第一発見者であるウェイランド看護師の証言により致死量の睡眠薬が紛失しているのが判明したことで、自殺の可能性が疑われる。しかし、この推論は、睡眠薬が下半身麻痺の病人には手の届かない場所に保管されていたことが明らかになったため、完全に否定される。ここから他殺説が生じ、もし他殺だとすれば犯人は一体誰なのか、犯行の動機は何であるのかが問われるようになり、推理劇の様相を帯びるようになる。ウェイランドはステラが妊娠していることを見抜いており、そのことが発覚する前に彼女がモーリスを殺害したと考えている。そして、看護師が一同の前で妊娠の事実を明らかにしたことで、それまで頑なに病理解剖を拒んでいたハーヴェスター医師も、しぶしぶこれを受け入れざるを得なくなる

第三幕では、冒頭から新事実が次々に暴露されていく — ステラとコリンの不倫、モーリスの笑顔の下に隠された苦悩、ウェイランドのモーリスへの想い、タブレット夫人とモーリスとの間で交わされた驚きの約束、夫人とリコンダ少佐との過去の恋愛等々 — こうして劇は進んで行き、リコンダによる元警察官らしい現実的な状況説明が行われた後、ステラを名指して殺人犯と決めつけて非難を浴びたウェイランドがその責任を取ってタブレット邸を立ち去ろうとする。同じタイミングで、ハーヴェスター医師が検視官に面会する手続きを踏もうとしたその時、タブ

レット夫人の口から衝撃の事実が明かされる。それは、前の晩にモーリスと最後に会った人間は、ウェイランドや一同が考えているようにステラではなく自分であり、ステラがモーリスのもとを離れることで彼が絶望してしまう前に、そして彼に「美しい夢」を見続けさせるために、睡眠薬を与えて殺害したのだという告白であった。夫人は、この行為は愛情から生まれたものであり、自分とステラ、ウェイランドの三人それぞれが、モーリスが必要としていた愛を提供していたのだと説明する。それを聞いたウェイランドは、自らの偏狭な心と行動を恥じて、夫人に許しを請い、ハーヴェスター医師にはモーリスの死亡診断書を出してくれるように頼み、終幕となる。

III

ここからは、三人の登場人物が示した愛について考察していく。まずは、モーリスの妻ステラからであるが、その前に、彼女の愛の対象が他の二人とは異なっている点について言及しておく必要がある。ステラはモーリスの妻であるが、劇中では彼の弟のコリンと恋仲になっている。そのため、ウェイランド看護師とタブレット夫人の愛がモーリス一人に向けられているのに対して、彼女は二人の男性を異なる形で愛している。そのためか、劇中で彼女が自らの愛について語る場面は限られていて、その本質を理解するのに（筆者も含めた）観客・読者は、彼女の気持ちを代弁しているかのようなタブレット夫人の台詞に多くを頼ることになる。

ステラのモーリスに対する愛を知るには、モーリスが彼女をどのように愛し、愛されることを望んでいたのかを考えることが必要となる。なぜなら、モーリスの不幸な事故の後、ステラはモーリスが自分を愛したいように愛させることを最優先にしていたと思われるからである。そのことを理解していたタブレット夫人は、「ステラはモーリスに与えられるものの全てを与えたと思います。残りは彼女の力の及ばぬことでした」と、彼女の献身を認めている。（『聖火』 141）

タブレット夫人は、事故後のモーリスのステラに対する愛を、「飢えた、

しがみ付くような、頼り切った愛」と評している。そして、その愛は「苦悩」から生まれたもので、「そんな愛でいつまでステラが我慢してくれるかと私は不安でした」と語っている。(128) モーリスは、下の世話はもちろんのこと、看病、彼の言葉では「病気の不愉快な面」に妻を関与させることを頑なに拒んだ。「君が消毒剤の匂いをさせるのは嫌だもの。君には夜明けの香りを放って欲しい」というのが、彼の切なる望みであった。

(37) つまり、彼は妻が自分の看病で疲弊し、女性としての魅力をすり減らしていくことを恐れたのである。

モーリス こんなことを言うつもりはなかったんだが、ただ、僕に生き続ける勇気を与えてくれたのは君だと言いたかったのだ。いいかい、僕は不幸ではない。これから何年生きるか分からないが、君が手伝ってくれるなら、何とか楽しくやって行けそう。全ては君のお陰だよ。明日、明後日、その次の日も君の顔が見られると思えば、どんなことも苦ではなくなる。体が一寸痛むときには、君がまた病室に入ってくればキスをしてくれるって考えるのだ。そうすれば、動悸がする心臓に君の唇の優しさを感じられる。(41)

モーリスは事故によって下半身不随となり、男性としての能力を失ってしまったため、ステラに対して負い目を感じている。それゆえに、ステラが女性としての輝きを保ちながら生きることを重視し、その手助けをすることが、夫である自分が果たすべき役割であると頑なに信じている。劇中では、モーリスが弟のコリンに、ステラをエスコートして、オペラ『トリスタンとイゾルデ』を観劇に行くように依頼したことが示唆されている。実は、彼がステラにプロポーズした晩と一緒に観たのが『トリスタン』であって、同じ劇に妻を別の男性と一緒に行かせたのは、傍目には彼の歪んだ愛情表現として捉えられなくもない。しかし、ステラに当時の記憶を呼び起こさせ、彼が「男」として彼女の「女」の部分をも

大限に刺激した過去を疑似的に再現しようという意図が込められていたのであれば、そこからはモーリスのあまりにも切ない妻への愛情を感じずにはいられない。

しかし、こうしたモーリスの愛情を、ステラ自身はどのように受け止めていたのであろうか？彼が自分の身体が回復不能であることに気付いていることを知った直後、ステラは次のように述べている。

ステラ（真面目な口調で）あなたが元気だった時、私たちがどんなに幸福であったか、今はそこに癒しを求めましょうよ。あなたが私に与えてくださった大きな愛に、私はこれからも永遠に感謝するでしょう。(38)

この言葉には、ステラのモーリスに対する過去・現在・未来の愛の形が内包されている。『トリスタン』の観劇後にリージェント公園を車で回りながら婚約を交わした彼女は幸福の絶頂にあって、それはモーリスの事故の直前まで続いていた。その事故から奇跡的に生還した彼は、ステラに前述したような歪んだ愛情を注ぐようになった。ただ、その愛情が彼女の中に生み出すことができたのは、過去の幸福の記憶から得られる現在の「癒し」と未来における「感謝」のみであって、彼女は夫の想いに対して自らの愛をもって応えられないことをはっきりと自覚している。彼女がモーリスの愛情に満ち溢れた感謝の言葉に対して、「私はこんな愛に値しないわ！ とっても恥ずかしい。私は身勝手だわ。無思慮だわ」と感情を爆発させるシーンは、そのことをよく表している。(41)

今のステラがモーリスに対して抱いている感情は、愛ではなく、哀れみであり義務感に他ならない。そのことは、彼女の次の台詞からも明らかである。

ステラ そんなことおっしゃらないで！ もしモーリスを心から気の毒に思わないとしたら、人間とは

言えませんわ。あの人、どんなに辛かったことでしょう。彼の不幸を少しでも和らげられるようなことがあれば、してあげるのが当然です。(51-2)

タブレット夫人もそのことには気付いており、「ステラの哀れみの情は無限だと分かっていました」とまで言っている。(129)しかし、彼女は同時に、ステラの哀れみの情があまりにも強いためそれを愛だと勘違いしており、そのことが二人の夫婦関係を歪めてしまっていることも看破している。(129)

タブレット夫人 偽りの夫婦関係がステラの神経に障ってゆくのを見ました。相変わらず親切で優しいのですが、努力した結果になってきたのです。花が香を与えるように自然にするのでなければ、人の行為に何の価値がありましょう？(129)

彼女がモーリスの愛に応えられない最大の理由は、事故によって彼が男性機能を失い、夫婦間の性生活を営むことができなくなったことにあった。このことについては、劇中、タブレット夫人がステラの気持ちを代弁するかのように、以下の言葉を述べている。

タブレット夫人 看護婦さん、あなたをびっくりさせることを言うかもしれないわよ。できるだけ上品に言うつもりですけど、イギリス人は偽善と気取りによってこういう話題を上品にしまったのです。いいですか、ステラは若く健康で正常ですね？だから彼女の年齢のとき私が持っていた本能を持たないなんてどうして想像できましょう。性本能は食欲と同様に正常なものであり、睡眠と同様に差し迫ったものです。どうして彼女がその満足を奪われてい

いのでしょうか？ (127)

タブレット夫人 モーリスの事故で彼とステラがもう男と女として生活できなくなった時、ステラがそんな偽りの関係を保持できるだろうかと考えました。二人は健康な若者として愛し合っていました。彼らの愛は深く情熱的なものでしたが、セックスに根ざしていました。時間が経てば、その愛も精神的な面を持つようになったでしょう。共に耐えた人生の試練のお陰で思いやりや信頼が生まれ、それが衰え行く情熱の火に新しい輝きを与えたことでしょう。しかし二人にはその時間がなかったのです。(128)

ステラ自身は、タブレット夫人のような直接的な物言いは避けているものの、モーリスのことを「女が男を愛するように愛さなかったのは本当」のことで、「以前は自然に感じていた女としての愛をもう感じなくなった自分を何度も責め」たことを認めている。「彼はとっとも親しい友人、とても気の毒な友人に過ぎなくなりました」とまで言っているのである。(135-6)

そんなステラの前に表れたのが、コリンであった。思いを寄せたのはコリンの方が先であったが、最終的に彼女は彼を受け入れた。(125) コリンとの愛について言及するステラからは、二人の関係がセックスに根ざしたものであることが見て取れる。

ステラ 自分を恥じるべきなのでしょうね。でも嘘は言いたくありません。感じていない後悔を装うのは嫌です。私がコリンを愛するのをやめないのは、雨が降り、樹木が芽を出すのと同じです。コリンが与えてくれた子供を誇りに思っています。(124)

ステラ お母様、私のことをどう思われようと、私の行為をどれほど怪しからぬと思われようと、私が浮気心でコリンを愛したのではないのは信じてください。私は全身全霊で彼を愛したのです。(126)

「雨が降り、樹木が目を出す」ように、自然の営みの中で二人は結ばれ、「全身全霊で」愛し合い、子供を授かったのである。ところが、同時に当時のイギリスの道德観が、それが肉欲から生まれた不貞の愛であるという認識を与えるがゆえに、ステラはコリンを愛することに後ろめたさを強く感じているのである。

ステラ モーリスを愛したのとは別の愛し方です。モーリスへの愛はいわば開け放たれた明るいものでした。吸っている空気のように自然のものでした。永遠に続くと思っていました。でもコリンへの愛には苦痛と後悔と、愛がいずれ消えるという苦々しい思いがありました。(152-3)

「愛がいずれ消えるという苦々しい思い」というのは、コリンがやがてはグアテマラに戻らなければならないということを念頭に入れてのことであろうが、それ以前に、二人は不倫の関係であるので、そもそも実ることのない愛なのである。実は、この台詞で筆者が注目しているのが、前段の部分、ステラがモーリスへの愛について語っている箇所である。明るく、空気のように自然で、永遠に続くような愛。ステラの精神はそうした愛を求めていたものの、彼女の若く健康な肉体がそれを拒んだのである。これについては、次項で改めて触れることにする。

IV

ステラとは異なり、ウェイランド看護師の愛の対象はモーリス唯一人

である。そして、彼女自身は、ステラがモーリスを愛することで得られていた「明るく、空気のように自然で、永遠に続くような愛」、つまり、道徳的に正しく精神性の高い愛に価値を置き、潜在的にはこれを強く望んでいる。同時に彼女は、どれだけ願ったとしても、そうした愛を自分がモーリスに与えることができない（彼から求められることが決してないがゆえに）ことを自覚しており、それゆえに、その愛をモーリスに与え続けることをしなかったステラを激しく憎むようになるのである。

実は、ステラが事故後のモーリスとの夫婦生活の中で「明るく、空気のように自然で、永遠に続くような愛」を感じることができていたのは、彼の不断的努力があったがゆえであり、ウェイランドにはそのことがよく分かっていた。

看護婦 （ステラに）若奥様がいらっしゃるところで常に冗談いったり笑ったりされていたからということで、モーリス様が暗い悲慘さに圧倒される瞬間があると思ひ浮かばなかったのですか？

ステラ （深い同情をこめて）可哀想に、あの人、どうして私に隠したのかしら？

看護婦 （激しい口調になるのを抑えながら）モーリス様の願いはご自分の苦しみをあなたにとって耐えやすくするということでした。どんなに苦痛があっても、あなたが哀れまないで済むようにというので、隠していらした。（101）

モーリスのこうした態度の背後にあったものについては前項で説明した通りであるが、病気の不快な面にステラを関与させたくないという想い以外にも、そうすることで彼自身が救いを得られていたからという部分が大きかったように思える。

タブレット夫人 ステラはモーリスにからかわれたら同じ調子で言い返し、彼が笑ったら一緒に笑うというのが、モーリスにとって一番嬉しかったと思いますよ。(102)

それゆえ、タブレット夫人は、「私はステラが献身的に息子に尽くしてくれたのにとっても感心していますよ」と言い、その理由として「人を援助する場合、その人が希望するように援助してあげるのが一番よいと思うのです」と答えている。(102) これをウェイランドに当てはめると、モーリスが彼女に求めた援助とは、病気に苦しむありのままの自分を晒した上で介護をしてくれることであつたが、そのことは彼女も理解しており、彼の期待に応えようとしたのである。

看護婦 私は給料を頂いて働く看護婦以外の何者でもありませんでした。モーリス様は絶望など一切私には隠そうとなさいませんでした。私には何についても振りをしなければならぬことはなかったのです。私に対しては滑稽なことをおっしゃったり、上機嫌の振りをなさったりする必要はなかったのです。どんなに不機嫌にしても、私なら構わないと思われたのです。私と口論され、感情を害したらごめんとおっしゃいましたが、私が感情を害するようなことはありえないとご存じでした。若奥様を笑わせるため、モーリス様は、道化よろしく、顔に白粉を塗り、鼻を赤くし、輪の中に飛び込みました。若奥様は道化の白い仮面しかご覧にならなかった。私は苦しみ悶える、時に勝ち誇った、裸の魂を見たのです。(102-3)

もちろん、ウェイランド自身が認めているように、これは病人が看護師

(しかも、個人の看護のために特別に雇われた者であればなおのこと)に求める態度としては至極当たり前のものであって、彼女も当初はプロとして彼の看護に徹していたに違いない。しかし、劇中では明示されていないが、モーリスの症状が悪化し、彼の苦痛と苦悩が深まるにつれて、彼女の彼に対する感情が変化していったように思われる。

看護婦 (激昂して) そうです、モーリス様を愛していました。あなたの愛が衰えて行くにつれて、私の愛は深まって行きました。あの方がとても無力で私に頼りきりだったので愛するようになりました。私の腕の中の子供のようでしたから愛したのです。(134)

最初は、憐憫の感情に過ぎなかったのかも知れない。しかし、モーリスのステラへの愛が決して報われないことを悟った時、ウェイランドはそれを自らが受け止めたいと強く願うようになったのである。

看護婦 私の愛はあの方には何の意味もありませんでした。あの方の心にはあなたへの愛以外のものが入る余地はなかった。でもあなたはあの方の愛に用はなかったのです。あの方はパンを求め、あなたは石ころを与えました。(134・5)

「マタイによる 福音書」第7章9節の言葉を引用していることから分かる通り、ウェイランドは自らの愛を、キリスト教の教えに則した高い精神性に根ざしたものであると考えている。しかし、看護師の夫への想いを知ったステラは、そこに性的なものを感じ取るのである。

ステラ あなたのモーリスへの愛にはセックスの要素が全然ないと思っているの？ 正常でない歪んだセックスの要素があると感じたものだから、気持悪

いので思わず身震いしたのよ。

看護婦 （食って掛かるような態度で）いいえ、いいえ。私のモーリス様への愛は神様への愛と同様に純粹で精神的なものでした。自分の利害など一かけらもないのです。思いやりとキリスト教的な慈愛でした。あの方にお仕えしお世話することを許されれば、それ以外は何も望みませんでした。あの方の瘦せた手足を洗って拭き、髭剃りの時鏡を顔の前に支えることが、充分な報いでした。唇に触れたのも、亡くなって冷たくなってから初めてのことでした。今は私の人生を美しいものにしていてくれた全てが失われてしまいました。あの方はあなたにとっては何だったのです？ お母様にとっては何だったのでしょうか？ 私にとっては友であり愛人であり神だったのです！ それなのにあなたは殺害してしまいました。（136-7）

もちろん、このやり取りが行われるまでの経緯を知れば、これが嫉妬心から生まれた売り言葉に買い言葉的な非難の応酬の結果に過ぎないことは明らかである。それでも、ステラの直観的を射ているように筆者には感じられる。確かに、ウェイランドの愛は精神的（プラトニック）なものであったのだろう。しかし、彼女がモーリスの手足を洗い、髭剃りの手伝いをしている間、彼女が性的な恍惚に包まれたことが決してなかったと言い切れるだろうか？ また、彼が亡くなって初めて唇に触れたのだという事実は、彼女が肉欲を隠し持っていたことを示しているのではなかろうか？

ウェイランドはセックスを「汚い」ものと決めつけて嫌悪しているが、それは自らの愛を、純粹で精神性の高い、そうあの「明るく、空気のように自然で、永遠に続くような愛」に少しでも近付けたいという思いから来たものだと考えられる。（136）ウェイランドが考える理想の愛とは、自

らがモーリスに対して施したような献身的な看護を通じて、彼の心身の辛さを真正面から受け止め、その上で無尽蔵の愛を注ぐことであった。彼は事故によってセックスを諦めざるを得なかったのだから、そもそも性的関係を求めることが間違いで、それでもなお成り立つ精神性の高い愛の関係を築くことが、道徳的にも正しい愛の形であると彼女は信じ込んでいるように思われる。それゆえに、「明るく、空気のように自然で、永遠に続くような愛」を捨てて、肉欲からコリンとの不倫に走ったステラの行動が、彼女には理解できなかったのである。

しかし、実際には、モーリスとステラとの間にウェイランドが望むような関係性を持ち込んだところで、「明るく、空気のように自然で、永遠に続くような愛」が生まれる可能性は限りなく低い。仮にステラがモーリスの苦悩を背負う生活を送ったのだとしたら、彼女が彼の前で明るく振る舞い、ジョークを交わし、美しいままで居続けることは難しかったであろうし、そもそもモーリス自身がそれを望んでいないのである。つまり、「明るく、空気のように自然で、永遠に続くような愛」は、彼が必死になって築いた虚像の上に成り立っている虚構の愛なのである。そうした愛をステラに感じさせることこそがモーリスが唯一望んだことであり、ステラも自覚のないままに、彼の想いに応えていたのである。登場人物の中でそのことを分かっているのはタブレット夫人だけであって、それゆえに彼女は、前述した「ステラはモーリスに与えられるものの全てを与えたと思います。残りは彼女の力の及ばぬことでした」という言葉で、ステラをねぎらっているのである。(141)

ウェイランドは、自らの愛が決して実らぬことを理解している。モーリスには自分への想いが無いことを知っているし、仮に想いを遂げたとしても、それは彼女の道徳観に反する不倫の関係になってしまうからである。それゆえに、彼女は自分の理想の愛を彼の妻であるステラに押し付けようとしたのであろう。彼女の愛は、精神性が高く道徳的であるかも知れないが、未熟である。その未熟さゆえに、モーリスのステラへの愛の歪みや矛盾を察知することができず、劇中の騒動を引き起こすに至ったのであろう。

最後に、タブレット夫人の愛について考察する。ウェイランドはステラがモーリスを殺害したと告発したが、それが全くの濡れ衣であって、真犯人はタブレット夫人であったことが物語の終盤で明かされる。

ここまでの考察で分かっていることであるが、タブレット夫人はこの作品で描かれるそれぞれの愛の代弁者である。彼女はステラ、ウェイランド、そしてモーリスの愛を言語化して、作中の登場人物と観客・読者に披露する役割を担っている。そうした言語化は、当然、彼女自身の愛についてもなされており、それがそのまま彼女によるモーリス殺害の動機の説明となっている。

タブレット夫人によると、全てはモーリスの不幸な事故に端を発している。彼が生死の境を彷徨っている間は、夫人もステラもただ彼の無事を祈っていれば良かったのであるが、奇跡的に生還したものの下半身不随となったモーリスを目の当たりにして、夫人は恐怖したのである。(129) 前述した通り、ステラは治ることのない慢性の重病人になってしまったモーリスを哀れむようになった。そして、その哀れみがいまにも深かったため、彼女はそれを夫への愛だと勘違いしていたのである。そのことがはっきりと分かっていたタブレット夫人は、ステラがその誤りに気付かないままであることを願っていた。何故なら、ステラが自分のモーリスへの気持ちが愛ではないことを知り、男性機能を失った彼との間で再び愛を育むことが無理だと悟った時、彼女がモーリスの元を離れる選択をすることが不可避であると考えたからである。そして、本当にステラが家を出て行ってしまうと、モーリスが生きる気力を失い、そのまま命が尽きてしまうことを夫人は恐れたのである。(129)

実は、モーリスとタブレット夫人の間では、彼が生きているのが耐え難くなったら夫人が命を絶つ手段を与えるという秘密の約束が交わされていた。そして、その後も事あるごとに、「約束はまだ有効？」と彼が尋ねていたことが夫人によって明かされる。(162) 当然、登場人物たち

は、モーリスが死の直前に母親にこの約束を果たすことを依頼したのかどうかを尋ねるのだが、これはタブレット夫人によって否定されている。

(163) つまり、夫人はモーリスからの依頼が無いままに、自らの考えで「約束」を実行に移したのである。

タブレット夫人は、ステラとコリンの関係を知りつつ黙認しており、むしろ、二人がそうなることを望んでいたと明かしている。(130-1) 何故なら、それでステラが「憐憫とか親切とかよりも強い絆でこの家に結び付けられ」と考えたからである。(131) つまり、ステラとコリンが男女の仲になれば、ステラの性欲が満たされるのと同時に、彼女の女性としての魅力はモーリスが望んだ通りに開花することになる。もちろん、二人の関係がそこまで深くなることを想定していた訳ではあるまいが、結果的にモーリスを満足させることにはなったのである。ところが、ステラはコリンを本気で愛するようになってしまい、そのことで「哀れみと愛の間には大きな差がある」ことに気付いてしまうのである。(136) このことは、タブレット夫人にとっても誤算であったに違いないが、リコンダ少佐と自分との過去の恋愛を明かし振り返っていることから、若い二人の愛が暴走してしまうことについては仕方のないことだと諦めている節がある。

タブレット夫人がモーリスを殺害した時点で、彼女がステラの妊娠について気付いていたことを明示する台詞は無い。ただ、妊娠経験のない若いウェイランド看護師が察知した位であるから、遅かれ早かれ夫人はそのことに勘付いたであろう。しかし、実際のところは、妊娠の事実が明らかになる前に、夫人はモーリスの命を絶ってしまった。そのきっかけとなったのは、ステラとコリンがオペラから帰ってきた後のモーリスの発作的な振る舞いにあったと考えられる。ステラに取り縋って泣いた彼は、彼女に優しく慰められて一時は落ち着きを取り戻したが、そこには普段とは様子の違う彼の姿があった。その晩、タブレット夫人は何故か眠ることができず、何となくモーリスも寝られずにいるのではないかと思い、階下に降りてから庭に出て、窓から彼の部屋を覗き込んだ。すると、モーリスが「お母さんなの、来るだろうと思っていたんだ」と言

い、彼女を部屋に招き入れたのである。(162)そこでモーリスは母親に、クロライン（睡眠薬）を飲んだのだけれど効かずにすっかり目が冴えてしまったのだと告げ、薬をもう一錠渡してくれるように頼む。それを聞いた夫人は、彼に致死量となる5錠の睡眠薬を与え殺害に及ぶのである。

この時の、自らの訪問を待ち構えていたようなモーリスの言葉から、夫人は彼がステラの愛を失ったことを悟ったことに気付いたはずだ。そして、モーリスが睡眠薬を求めた瞬間、彼を絶望から救う手立ては「約束」を果たすこと以外にはないと確信したのである。

タブレット夫人 ステラの愛がモーリスにとって全てを意味すると分かっていました。その一方ステラは全ての愛をコリンに与えたのでモーリスに愛を与えることが出来なくなったのも知っていました。人は誰でも幻想を頼みに生きています。幻想を保ち続けられるように頼む以外のことを人に頼むことはできません。モーリスが苦悩しつつも何とか生きられたのは幻想に支えられていたからです。幻想が失われれば、全てが失われます。(163)

タブレット夫人が、彼女の言うところの「幻想 (illusions)」の大切さを理解できるのは、子供のことを考えた末、リコンダ少佐との関係を断ち切った過去があったからである。その時、彼女は「こんな大きな犠牲を払うなんてありえない」と苦しみ抜いたと言っている。(163)もちろん、今となってはその犠牲が大したことではなかったということを彼女は知っているのだが（それゆえに「幻想」なのである）、今のモーリスがこの幻想を失ってまで生き続けることができないことは、彼女にははっきりと分かっていた。そこで、彼に永遠の眠りを与える決断をしたのである。

タブレット夫人 彼が夢見ていたのは美しい夢でした。あの子をとっても愛していたので、その夢から覚め

ないようにしてやろうと思ったのです。あの子に命
を与えた私があの子から命を奪ったのです。(164)

この台詞の最後の「あの子に命を与えた私があの子から命を奪ったの
です」という言葉は、タブレット夫人のモーリスに対する愛の本質を表
したものであると言えよう。それは「母親のわが子に対する愛」である。

セリナ・ヘイスティングス氏 (Lady Selina Shirley Hastings) によ
ると、『聖火』は、モームの実兄チャールズ(Charles)の息子(モームに
とっては甥にあたる)の実話をヒントにしている。この子は12歳の時
木登り遊びの最中に落下し、下半身が麻痺してしまった。その後、19歳
になった息子を献身的に介護する兄嫁の姿がモームの心を強く動かし、
彼がこの作品を書く直接の動機になったと言われている。(Hastings,
346)

また、この戯曲を翻訳した宮川誠氏は「訳者あとがき」の中で、『人
間の絆』(Of Human Bondage: 1915)で、モームが書いた「この世に
もし純粋な愛情というものが存在するとするなら、それは母親のわが子
に対する愛ではあるまいか」という言葉を引用し、稀にみる美人だった
母を8歳のときに失った彼が、生涯彼女の写真を身近に置いていたとい
うエピソードを紹介している。そして、タブレット夫人のモーリスに対
する愛情は、『フレデリック夫人』で夫人が息子のためにパラダイン
(Paradine)との恋の逃避行を諦めるところにも通じており、どちらの
作品でもモームの個人的願望ともいえる母と子との関係が表現されて
いると考察している。(147-8)

前述した通り、タブレット夫人はリコンダ少佐との愛を息子たちのた
めに断念したのだが、今となってはその犠牲は実は大したことではなか
ったのだと考えている。何故なら、彼女は息子たち、事故後は特に、自
他共に認めるようにモーリスを溺愛していたからである。(『聖火』163-
4) 母親のわが子に対する愛は、すべてを超越する。それは、ウェイラ
ンドが抱えていた頑ななキリスト教的な倫理観や愛の定義、そして、安
楽死の議論すら吹き飛ばす力を持っているのである。劇の最後の場面で、

ウェイランド看護師はハーヴェスター医師に偽の死亡診断書に署名することを促し、医師も倫理規定に抵触することを承知でこれを受け入れる。リコンダ少佐も、元警察官としてはあるまじき行為ではあるが、これを容認し、その決断をしたウェイランドに感謝をしている。ステラとコリンは、夫人の提案に従い、アメリカに渡り、結婚し、子供を産み育てることになるであろう。言うなれば、モーリス・タブレット殺害事件は、母親の愛によって完全に隠蔽されてしまうのである。

VI

ヘイスティングス氏によると *The Sacred Flame* というタイトルは、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772 - 1834) の詩 “Love” の第一連から取られたそうである。

All thoughts, all passions, all delights,
Whatever stirs this mortal frame,
All are but ministers of Love,
And feed his sacred flame.
(Hastings, 346)

この中の “All are but ministers of Love,” (すべては愛の使者に過ぎない) という一節は、ここまで述べてきたステラ、ウェイランド、タブレット夫人 (そして、モーリス) の愛を表しているように筆者には思える。それが性に根ざしたものであれ、哀れみから生まれたものであれ、キリスト教的な道徳観が反映されたものであれ、母性愛であれ、すべては愛であり、それは時と場合によっては社会の倫理や法律でさえも凌駕するのである。そうした愛の最もパワフルな実践者であり代弁者であるタブレット夫人は、次のような言葉を述べている。

タブレット夫人 お別れする前に、あなたをとて

も不幸にしている不快感から、できればあなたの心を解放して差し上げたいの。ねえ、人間って首尾一貫している人は唯の一人もいないでしょ。人間は一面だけでなく半ダースの面を持っています。それだから、あなたがステラに嫉妬するのは間違っていたのです。モーリスが一面で欲していた全てのものを、あなたは彼に与えたのです。それ故、彼のその一面はあなただけのものでした。

人は万人にとってなら全てのものでありうるかもしれない。でも特定の個人にとって全てのものというわけにはいきません。また特定の個人がだれにとっての全てのものではありえません。私はモーリスの母として誰も知らない息子の一面を知っていたので、他の誰にも与えられぬものを彼に与えました。私は他の誰の邪魔もしませんでした。息子をステラに結び付けていた恋心、彼をあなたに結び付けていた優しい仲間同士の気持、そのいずれにも私が嫉妬などしたとしたら、恩知らずで不寛容な態度を取ったことになったでしょう。ウエイランドさん、あなたのモーリスへの親切とあなたが彼に抱いていた私心のない愛に対して、神があなたを祝福してくださいますように！（『聖火』 158-9）

愛の強さを目の当たりにしたウエイランドは、タブレット夫人の前に跪き、彼女を両手に抱きしめて、自らの心の狭量を恥じる。そして、夫人はそんな彼女を受け入れて愛を与えるのである。

タブレット夫人 さあ、さあ、誰も感情的になってはだめですよ。ウエイランドさん、モーリスが亡くなった今、あなたも私も淋しい女になりました。お互いに

助け合って生きて行きましょう。あなたと私が心の中でモーリスへの愛を抱き続けている限り、彼は完全に亡くなったわけではないのです。(166)

こうは言っているものの、若いウェイランドがモーリスへの愛を生涯貫ける保証はどこにもない。しかし、タブレット夫人の我が子への愛は永遠だろう。そして、それこそがモーリスが愛を抱き続け、それゆえに彼の心の中で永遠に生き続けた亡き母親に求めた彼の理想の愛だったのである。

- * 本稿における *The Sacred Flame* からの引用文の訳については、1954年に出版された Heinemann の *The Collected Edition* や別版の原典を参照した上で、2017年に講談社から刊行された行方昭夫氏による『聖火』および2015年に私家版として発刊された宮川 誠氏による『聖なる炎』の訳を参考にさせていただき、引用箇所については行方訳のページを示すことにした。また、タイトルの日本語訳についても、行方訳の『聖火』で統一した。また、訳本では「ウェイランド」となっている部分は、文中では「ウェイランド」に、「看護婦」となっている箇所も「看護師」に置き換えている。

参考文献

- Calder, Robert Lorin. *W. Somerset Maugham & The Quest for Freedom*. London: Heinemann, 1972.
- Hastings, Selina. *The Secret Lives of Somerset Maugham*. London: John Murray, 2009.
- Maugham, William Somerset. *A Writer's Notebook*. London: Heinemann, 1949.
- _____. "The Sacred Flame: A Play in Three Acts." *The Collected*

Plays of W. Somerset

Maugham. Vo.3. London: Heinemann, 1954.

澤田靖士 「モームとの再会『聖火』」『CAP FERRAT 11 日本モーム協会誌』日本モーム協会、2015年。

田原 創 「日本におけるモームの芝居」『CAP FERRAT 17 日本モーム協会誌』日本モーム協会、2021年。

行方昭夫 『モーム語録』 岩波文庫 岩波書店、2010年。

行方昭夫 『モームの謎』 岩波現代文庫 岩波書店、2013年。

宮地國政 『モームの芝居』 英宝社、1991年

W. S. モーム 『サミング・アップ』 行方昭夫 訳 岩波文庫 岩波書店、2007年。

W. S. モーム 『聖火』 行方昭夫 訳 講談社文芸文庫 講談社、2017年。

W. S. モーム 『聖なる炎 三幕』 宮川 誠 訳 私家版、2015年。

W. S. モーム 『The Sacred Flame 「聖なる炎」』 北川悌二、行方昭夫 編注 北星堂書店、1963年。

リチャード・コーゲル 『モーム評伝』 田中睦夫 訳 文理書院、1961年。